

# パソコン通信と年齢差

土屋真美子

職場で、パソコン通信なるものを始めることになった。パソコン通信とは耳慣れない言葉だが、要するに自宅にあるパソコン、ワープロを電話線をつないで、ホストコンピュータの様々なサービスを受けられるようにしたものである。現在東京を中心に多くのホスト局がつくられ、提供するサービスも様々。データベース機能を売りものにした商業ベースのもの、コミュニケーションを重視したものなど、雑多である。

我が社のパソコン通信は主にコミュニケーション手段として導入された。その導入にあっては、我が

職場でも多くの議論がなされた。女性が機械に弱いとは一概に言いたくはないが、女性からの摩擦が大きかったのは確かである。「機械に頼るより、手作りのぬくもりのあるコミュニケーションを大事にしたい」というのが大方の反対理由。これもわからなくはないのだが、「21世紀に生きる人間にとって、一生パソコンにふれないで過ぎる、というものはやはりえない」という一人の意見で皆渋々納得させられ、パソコン通信は稼動し始めた。

いざ、稼動しはじめてみると、いろいろなことに気がついた。まず、男女差よりも年齢によって取り

組み方が違う。10代から20代前半の人間はパソコンをままずおもしろがる。自然に自分たちの道具として受け入れる。それが30歳を越えると個人差が出てくる。まったく拒絶反応を示す人。仕事だから、と取り組む人。けっこう面白がる人。しかし、こんな人であっても理解力は10代にまるつきりかなわない。おそろしく時間がかかる。また、彼らの中では男性の方が女性よりも関心を示す確率がたかい。

40歳以上になると、時代から取り残されては困ると思うのか、「パソコン」には無条件に賛成する、という話を聞いたことがある。自分でやるかどうかは別問題だけれど。

それにしても、10代のパソコンに対する対処の仕方を見ていると驚かされる。何の苦もなくパソコンに取り組む。まるで、人とおしゃべりしているような感覚である。これはかなわない。

これが、今、ファミコンをあやつる子供たちにと

ってはどうかだろう。もう、導入に際しての論議などなにをか言わんや。パソコンとは当然「ある」ものなのである。彼らがパソコン通信を使っているのはまだ見たことがないけれど、やすやすと使いこなすだろう。

パソコンに代表される情報化が、産業革命に次ぐ技術革命になる、といわれたのが2、3年前。最近では、東京一極集中、地価高騰など情報化の弊害も出始めている。ファミコンに興ずる子供たち、そして生まれた時からパソコンに囲まれている子供たちが成長した時、どんな世の中になっているのか、ちょっと想像がつかない。だから、21世紀には40代になっていくはずの私でも、そんな変化を見逃すことのないよう、機械とは付かず離れず付き合っていくように思う。